

# 第二回地域研究コンソーシアム賞 受賞者発表

地域研究コンソーシアム事務局

地域研究コンソーシアム（J.C.A.S.）は、その規約において「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とする。これにより、人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図る」と述べ、それに続いて（一）共同研究の企画・実施・支援、（二）海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、（三）研究成果の国内外への発信・出版、（四）地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げています。

地域研究コンソーシアム賞は、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあつた研究業績、共同研究企画、そして社会連携活動を広く顕彰することを目的として授与されます。研究業績を対象とする「研究作品賞」、若手研究者の研究業績を対象とする「登竜賞」、シンポジウムなどの研究企画を対象とする「研究企画賞」、社会連携活動を対象とする「社会連携賞」の四つの部門によって選考を行い、毎年秋に行われている年次集会で受賞者を発表・顕彰しています。

地域研究コンソーシアムの詳細についてはウェブサイト <http://www.jcas.jp/> を、地域研究コンソーシアム賞については <http://www.jcas.jp/about/awards.html> を参照ください。

## 第2回(2012年度)地域研究コンソーシアム賞 審査結果および講評

第二回(二〇一二年)地域研究コンソーシアム賞(丁CAS賞)の授賞対象作品ならびに授賞対象活動について同賞審査委員会の審議結果を発表する。

今回は、研究作品賞、登竜賞、社会連携賞、研究企画賞の四部門で審査を行った。各委員の活発な議論と慎重な審議の結果、それぞれの部門について以下の作品あるいは活動を授賞対象として選出した。

### ●研究作品賞授賞作品

高倉浩樹著『極北の牧畜民サハ——進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』  
(昭和堂、二〇一二年)

### ●登竜賞授賞作品

水谷裕佳著『先住民パスクア・ヤキの米国編入——越境と認定』  
(北海道大学出版会、二〇一二年)

### ●社会連携賞授賞活動

西芳実氏の「インドネシア共和国アチェ州における地域情報学を活用した災害対応に関する国際ワークショップの実施」活動  
(二〇一一年二月二日～二六日、インドネシア、バンダアチェ州で開催)

### ●研究企画賞授賞活動

該当なし

受賞された三氏には、委員会を代表して心からの祝意をお伝えしたい。以下は、各賞の授賞理由ならびに授賞作品・活動に対する講評である。

二〇一二年一月三日

地域研究コンソーシアム賞審査委員会

委員長・田中耕司 委員・飯塚正人・家田修・中村安秀・毛里和子

### 研究作品賞

#### 高倉浩樹著

#### 『極北の牧畜民サハ』

——進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌——

本書は、一九九九年から二〇一〇年にわたって実施された現地調査にもとづくシベリア東部の牧畜民サハの民族誌である。ソ連社会主義体制の崩壊、そしてその後のポスト社会主義というコンテキストのなかで、牧畜民サハの牛馬牧畜を中心とした生業複合を「ミクロ適応」という概念を軸に記述して、新たな変化に対するサハ社会の適応の過程を詳細に明らかにしている。生業複合を構成する家畜飼養技術や、自然資源利用の技術と制度の適応過程を詳細に分析し、その成果を完成度の高い表現によって同時代の民族誌として提示した点が高く評価された。

高倉氏が現地調査にあたってとった手法は、生態人類学と社会人類学を融合させたアプローチであった。しかし、人類学的手法にとどまらず、生物学・生態学における進化や適応の概念を文化史や地域史あるいは生業構造や生業複合を記述する手法として取り入れたことによって、対象社会をより相対的な空間的・時間的広がりの中で記述することにも成功している。この詳細な記述の骨格となる理論的背景が本書を上梓するにあたって書き下ろされた第一章

「序論」と第一〇章「結論」で展開されている。そしてこの両章が、文理融合や学際融合という「掛け声」が声高にある現在にあって、ひとりの学徒が歩んだ融合に向けた理論的模索のあとを如実に示す記述であるとともに、地域研究の理論と方法をめぐる議論への貴重な示唆となっている点を地域研究への大きな貢献として高く評価するという意見が多く出された。

著者が述べるように、本書は、「現代ロシアの非『主流社会』の市場経済化についての地域研究」として高く評価されるというのも審査委員の一致した意見であった。では、この現地調査からうかがえる「現代ロシア」とはいかなるものか。極北の少数民族である非「主流社会」から「現代ロシア」はどう見えるのか。その点をぜひ論じてほしかったという意見が審査委員から出されたことを付記しておきたい。「離見の見」の立場にある著者が、「現地の視点」(我見の見)を踏まえた「見所同心」の視点から現在のロシアをどう描いてくれるのか。素晴らしい民族誌を残してくれた著者から、次は、「見所同心」の視点に立ったロシア地域研究の作品が生まれることを期待したい。

登竜賞の選考にあたって審査委員会ではこの作品を授賞対象とすることをめぐって二つの意見が拮抗したことを記しておかねばならない。候補作品の完成度を重視したいという意見と、登竜賞の「登竜」がもつ意味（将来可能性）をより重視したいという意見の二つである。結果的には、地域研究コンソーシアム賞の趣旨として分野横断性や地域横断性が強調されていることを踏まえて、後者を重視するという結論になり、本書が授賞対象として選ばれた。

このことが示すように、本書は、一個の作品としては荒削りであることは否めない。荒削りであることについては、審査委員会ではさまざまな意見が出された。米国におけるエスニックスタディーズや先住民研究のなかに本書をどう位置づけるのかについて十分な議論が展開されていない、対象としたバスクア・ヤキの米国先住民認定に至る過程の調査から他の地域や事例との比較を経て地域研究へと発展させようとする視点が欠けている、フィールドワークで得られた一次資料よりも既存の史料に依拠する点が多く現地調査の実態が明確でない、事象のディテールの記述が十分

でない、終章が各章の繰り返しにすぎず物足りない、等々の意見である。

その一方で、米国アリゾナ州に居住するバスクア・ヤキの法的、社会的、歴史的な先住民化の過程を扱った本書からアメリカの歴史を読む新鮮な視点を得ることができ、新たなアメリカ研究の成果として評価するという声も少なくなかった。そして何よりも審査委員の多くが登竜賞にふさわしい作品として評価したのは、バスクア・ヤキに対する水谷氏の強いコミットメントの姿勢が本作品からうかがえたからである。水谷氏がこの研究に着手したきっかけは、「多くのバスクア・ヤキの人々が、米国先住民認定について『知らない』『分からない』と答えた」ことであるという。なぜ「知らない」「分からない」なのか。この素朴な疑問に始まって、それを解き明かそうとする調査があり、バスクア・ヤキの人々が読者となることを想定して本書が執筆された。研究対象であるバスクア・ヤキへの水谷氏のこうした自覚的な関わり方を評価したいという意見が多く出された。

バスクア・ヤキは先住民認定を受けたアリゾナ州居住の人々だけでなく、隣国のメキシコ側にも居住しており、民族自体がトランスナショナルな存在である。その一方で、先住民認定を受けたことにより、国境を挟む両地域の人々あるいは認定居住地以外に住む人々とのあいだに心理的な

距離が生まれているという。このことが示すように、本書

を起点に民族や国家、主流と非主流、中心と周辺など、地域研究のさまざまな課題に迫る今後の研究展開の可能性をうかがわせてくれるのも本書が登竜賞にふさわしいとして評価された点である。日本におけるこの分野や地域に関する研究蓄積が少ないだけに、先住民認定による米国への編入過程を詳細にまとめた水谷氏が、今後は、スペイン語を駆使してメキシコ側居住者の研究を進めるなど、アメリカ理解の一助となる研究成果をさらに紡いでくれることを期待したい。また、その期待が登竜賞にふさわしい作品として本書を推すことになった理由であることも付記しておきたい。

#### 社会連携賞

西芳実氏の「インドネシア共和国アチェ州における地域情報学を活用した災害対応に関する国際ワークショップの実施」活動

大規模自然災害や地域紛争が起こった地域に対して地域研究はどのような貢献ができるのか。この課題に地域研究コンソーシアムはその設立当初から取り組んできた。災害や紛争発生地域に関する正確で詳細な地域情報の提供、緊急支援に対する地域の専門家としての助言と支援活動への参加、災害後や紛争後の地域復興に向けた長期的な支援のあり方に対する提言や支援活動への持続的な参加など、さまざまな貢献のあり方が模索・実践されてきた。

地域研究コンソーシアムがこれまで取り組んできた上記に関係するさまざまな活動を参照しつつ、審査委員会は、推薦された国際シンポジウムの企画・運営にあたって西氏が大きな役割と貢献を果たしたことを評価して、西氏の活動を授賞対象として選定した。

授賞対象とした国際ワークショップは、組織的には、JSTJICA地球規模課題対応国際科学技術協力事業（SATREPS）「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」、京都大学地域研究統合情報センターの「地域情報学プロジェクト」、同センターの「災害対応の地域研究

プロジェクト」の三つの研究プロジェクトが合同で行った一連のシンポジウムとワークショップからなっている。シンポジウム／ワークショップの内容自体が日本側とインドネシア側の双方向の経験と知識の交流という点で十分によく練りあげられたものであったが、西氏は、開催地となったアチェ州での長い現地調査の経験を有する研究者として、これら一連のシンポジウム／ワークショップの企画・運営にあたって、災害復興の当事者である地域社会の構成員を参加させることを強く推進し、それを成功裏に実現した。日本と対象国の研究者や政府関係者が英語で国際シンポジウムを開くのではなく、地域社会の構成員を交えて、日本語と現地語（この場合はインドネシア語）で開催して、研究という枠組みを越えたさまざまなレベルでの連携を生み出す仲介者の役割を果たしたことが評価された。また、報告書をまとめるにあたって、インドネシア語の要約版を制作するなど、シンポジウム／ワークショップの成果還元にも努めている。

地域研究統合情報センターがこのシンポジウム／ワークショップの実現と、とくに地域情報学のツール活用に関して組織主体として大きな役割を果たしているが、西氏が主導した今回の企画は、研究組織や研究者が災害地域の復興に関わるべき一つのモデルを提示しているという点を評価する意見もあった。一方で、報告書そのものは研究組織

あるいは研究者の視点からまとめられており、NGOや現地社会の構成員がその制作に関与した形跡がうかがえないことを指摘する意見もあった。現地でのシンポジウム／ワークショップに参加した地域社会の構成員を報告書などの成果物の作成にどう参加させていくのか。さらにはシンポジウム／ワークショップの開催時に示された彼らとの連携を今後どう持続的に組織化していくのか。授賞対象活動の選定にあたって、地域に関わる研究者が意識しておくべきではない課題があるという指摘があったことを披露しておきたい。

## 受賞者紹介

### 研究作品賞



高倉浩樹  
(たかくら・ひろき)

東北大学東北アジア研究センター准教授、社会人類学・シベリア民族誌。上智大学・東京都立大学大学院で地域研究・人類学を学ぶ。ソ連崩壊後の一九九四年からシベリアでの本格的な現地調査を開始した。狩猟採集・牧畜などの伝統的自然利用文化、エスニシティや先住民問題についての論考・著作を発表してきた。近年は、気候変動と災害に関する文理融合的な取り組みや、映像を用いた異文化交流実践などにも意欲的に取り組んでいる。

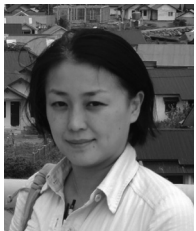
### 登壇賞



水谷裕佳  
(みずたに・ゆか)

北アメリカ大陸の先住民が直面する諸問題について研究。二〇〇八年三月に上智大学大学院外国語学研究所地域研究専攻博士後期課程を単位取得満期退学後、二〇〇九年三月に同大学より博士(地域研究)取得。カリフォルニア大学バークレー校エスニック・スタディーズ研究科客員研究員、北海道大学社会科学実験研究センター博士研究員、北海道大学アイヌ・先住民研究センター博士研究員を経て、二〇一二年四月より東洋大学社会学部助教。

### 社会連携賞



西 芳実  
(にし・よしみ)

京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門はインドネシア地域研究／現代史。東京大学大学院総合文化研究科博士課程(地域文化研究専攻)修了。一九九七～二〇〇〇年にインドネシア共和国アチェ州シアクアラ大学に留学。東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム助教を経て二〇一一年より現職。調査地のアチェ州が最大の被災地となった二〇〇四年一二月のインド洋津波(スマトラ沖地震・津波)以降、地域研究の立場から人道支援や防災研究といった異業種・異分野に活用可能なたちで地域情報を発信する活動に取り組んでいる。

高倉浩樹 著

『極北の牧畜民サハ——進化とミクロ  
適応をめぐるシベリア民族誌』

(昭和堂、二〇一二年)

池谷和信 (国立民族学博物館教授)

はじめに

これまで、ソ連社会主義の崩壊する一九九〇年代初頭以降、ロシア国内に暮らすネネツ、エヴェン、チュクチ、コリヤーク、ナーナイ、ニプフ、ウイльтаなどのマイノリティの社会経済変化に関する研究が国の内外で蓄積されてきたことはよく知られている。その結果、同じ民族内においても崩壊後に生まれた農業経営体の種類や、家畜の個人所有のあり方などの社会主義時代の経験の違いに応じて社会経済変化の内容は大きく異なっていることは明らかにされてきた (Yoshida 2001: 池谷二〇〇七ほか多数)。本書では、これらの問題枠組みのなかであり注目されてこなかったサハ人を対象にしたものである。彼らは、マイノリ

ティのなかでは人口が多く(サハ共和国の面積は三一〇万平方キロで人口は約九五万人、このうちサハ人は約四五万人、四四頁・本書の頁数を示す)、一九九〇年以降における社会主義崩壊後においてどのように市場経済化などに対応してきたかが本書の課題である。

しかし、本書は、この課題の追求のみにとどまらない。副題にみられるように、進化と適応の概念を用いて、サハ人の生業活動を中心とする民族的な資料を人類文化史のなかに位置づけることを構想する。これまで、「極北の民」といえば、北米の狩猟採集民イヌイト(エスキモー)やシベリアのネネツや北欧のサミのようなトナカイ牧畜民が、よく知られてきた。しかし、本書では、もうひとつの極北環境への適応形態として牛馬飼育という生業活動に注目している点が、本書の最大の特徴になっている。

## 本書の内容

本書は、全体が一〇章から構成され、巻末には英語とロシア語による目次と要約が付記されていて本書の要点を知るには便利である。まず第一章では、本書の目的、方法、分析に使う基本概念が整理される。ここでは、牛馬飼育民サハ人の民族誌を「極北牧畜」や「極北適応」のなかの一つとして位置づけ、生業複合、生業体系をとおしてみた適

応に焦点を当てるとする(三頁)。同時に、マクロ適応とミクロ適応という二つの基本概念を紹介して、本書はきわめて短い時間(ポスト社会主義時代)にみられるミクロ適応を問題にすると言及する(一五頁)。

第二章では、対象地域のレナ川中流域における自然生態と民族文化史の概観が紹介される。サハ人が暮らすヤクーチアは、夏は高温で冬は極度の低温になる北極圏・亜寒帯地域に位置する。また、この地域は、レナ川流域の河岸段丘を除けばカラマツを中心とする落葉樹林におおわれており、部分的にはアラスと呼ばれる円形の草原が多数点在している。土壌は、永久凍土である。さらに、古くはサハ人がバイカル湖周辺で五畜による牧畜と農耕からなる生業に従事していたという(三四頁)。その後、帝政ロシアの時代、社会主義時代そして現在というように対象地域の歴史の概略が示される。そして第三章は、近代化以前におけるサハの伝統的な生活風景、社会主義時代の農業集団化、ポスト社会主義の変遷をふまえてサハ人の父親像の変化に言及する。

第四章から第八章までは、農村に暮らす現代のサハ人の生業複合のなかで個々の生業活動をとりあげて、それぞれをより具体的に記述する。第四章では、凍結水面下での秋の漁業の実際や生業暦のなかでの漁業の位置づけ、そして冬季に困難である飲料水採集活動の実際が紹介される。両

者とも、極北への生業適応の特徴をよく示している。

第五章は、ポスト社会主義時代の新しい農業政策を概観したあとに、これまでとは異なりタバガ村(人口一八八八)に焦点を当てて、そこでの生業活動の複合状態を報告する。ここでは、ソビエト時代に八つの国营農場があったが、現在、集団経営型とファミリー経営型(農民経営体)の二つに分裂したという(一〇一頁)。それぞれ、二二の企業体に一七〇〇人、三八八に二四〇〇人が働いているという。住民は、ほとんどこれらで働いているが、敷地内の畑や家畜小屋の牛飼育などの個人副業経営にも従事している。本章では、「副業」(筆者による括弧)のなかで冬季の舎飼いの牛の餌としておこなう草刈り、漁撈、ベリー採集、狩猟などの概観が述べられる。

そして、第六章から第八章にいたる部分が、約一〇〇頁以上割かれていて、本書のなかで最も実証的なデータで裏付けられた中心部を占める。第六章では、対象地の自然資源利用のなかで中心を占めるアラスでの草利用が述べられる。ここでは、草刈りの歴史の変遷を概観したあとに、地名を中心とした空間認識や土地利用の観点から秋の採草地の利用の詳細が紹介される。第七章と第八章は、サハ人にとってもっとも伝統的な生業である馬飼育活動に焦点を当てて、前者ではその管理技術や生殖管理について、後者では農村内にとどまらず都市住民にも広がる馬飼育をめぐ

る委託慣行について詳述される。そして、第九章では、牛馬飼育を中心にすえたサハ農民による牧畜生産からみた市場経済適応の全体がまとめられる。

以上のような、本書の各章は、筆者による既存の論文を主に組み合わせてつくること、サハ共和国内のサハ人を対象にして、家畜飼育を中心とした現在の生計活動の実際に焦点を当てたものである。以下、評者は、三つの点から本書の内容に対してコメントをする。

## 本書へのコメント

第一は、本書の内容の構成に関する点である。英文の要約にあるように、「本書はサハ人に関する日本人による最初のモノグラフ」であり、冒頭で述べたようにこれまでのマイノリティーの研究のなかでサハ人が含まれていなかった点によく理解できる。これは、本書の最大の売りといつてよいであろう。しかし、本書の特徴や独創的な点を読者がどこまで理解できたであろうか。それは、サハ人を対象にした内外の研究史が書かれていないことが原因であろう。評者の私見によると、文献資料を中心とした斉藤の一連の研究（斉藤一九九五）、サハ人の儀礼の復興をテーマにした山田の研究（山田一九九八）などの先行研究はよく知られている。本書でも頻繁に引用されているクレイトの

サハ人の村での雌牛生産と乳や肉をめぐる分配システムの研究（Crate 2006）なども序論の研究史にまとめざるべきであったのではないだろうか。これらによって、馬飼育と牛の餌となる採草地利用を中心とした本書の特徴や独創的な点を読者により誤解なく伝えることができたであろう。

その上、各章の調査地がサハ共和国のなかであちこちにみられるので（二五頁の地図参照）、生業複合の実際やポスト社会主義時代の適応に関する議論が荒いという印象をぬぐえない。筆者が最も詳しい村であるタバガ村の事例（例：第五章）を中心に据えて論を組み立てた方がよかったのではないだろうか。そして、はたしてタバカ村の生業複合の実際を考える際に、村のなかでの世帯別の違いはないだろうか、漁撈ではカムガッタ村やニュング村の事例（第四章）を、馬飼育ではサクリール村（第七章、一五〇頁）の事例をどのくらい参照してよいものか、本書内での撮影地の異なる各地の写真をみても感じるところである。この点が、本書のなかでサハ人の歴史概観やロシアの農業政策史が重複して記述されることにもつながっているであろう。

第二は、本書のタイトルにある「牧畜民サハ」と、本書の中心的な対象である「サハ人の村」の実像との大きな違いである。読者が、どこまでその違いと共通性を理解できたのか疑問である。本書でも引用されている東アフリカ提示（一九頁）に、評者は同意するものである。しかも、国家の影響を長年にわたっていたサハ牧畜民という捉え方は、まさに本研究の意図としてはよく理解できる。ただ、そのためには、サハ牧畜民の歴史の変遷を正面に据えた広義の歴史学的研究をしなくてはならないであろう。なお、この点は、南アフリカ共和国のなかで、近代化の歴史の長い牛牧畜民コイコイに対しては、人類学的な研究よりも歴史学者エルフィクの研究などがより大きな成果を出していることなども参考になるかもしれない（Elphick 1977）。

評者は、本書のなかで「馬の民」であったサハ人が帝政期に牛中心の牧畜に変化した点、一八世紀に農業も行うようになった点、本書ではふれていないがその後の農業の変遷（小麦、大麦、オート麦の栽培など）が、生業の変化を考えるうえで見逃せないとみている。なかでも、（Ⅰ）牛馬牧畜型、（Ⅱ）トナカイ・牛馬牧畜型、（Ⅲ）牛飼育・農業型にサハ人の三つの家畜飼育形態の地域差が論じられることもあり（斉藤一九九五：一四三）、最後のタイプが気になる所である。

本書では、サハ人を馬の民（四一頁）、狩猟牧畜民（一二頁、二一三頁、二五一頁）、牧畜民、牛馬飼育民（二頁）、少数民族（一九頁）などと呼んでいるが、これらの違いの背景には生業や地域政治の変化が関与しているのではないかと推察する。これらの用語は、もう少し整理が必要

（ケニア）に加えてシベリア（チュクチ）の地域を訪問した評者の私見によれば、東アフリカの牧畜民とサハの人々ではあまりにも実像が異なっている。社会主義的近代化を経たサハの農村は、東アフリカ（例、マサイ）の村よりも北海道や本州の酪農村などの景観や社会経済生活に近いのではないだろうか。ただし、上述したサハ人の村の集団経営型の方は日本ではなじみがなく理解が難しいであろう。本書では、サハ人の村のなかで馬飼育に関する牧畜文化の詳細を知ることができ、しかも子馬肉の商品化の時期が新しいなどの歴史的分析はとても興味深い内容を示している（二五七頁）。しかし、本来ならば、サハ人の家畜飼育以外の農村の社会経済生活を十分に紹介して、馬飼育の位置づけをより明確にすることが重要であろう。馬牧夫の仕事、馬群の管理技術、委託関係などの貴重な資料の提示は十分に評価できるが、これら資料の地域社会のなかでの位置づけをより詳細に行う作業が必要ではないだろうか。

本書から、個々人が中心となる仕事に従事して、「副業」として狩猟、採集、漁撈、牛飼育、（農耕）を組み合わせていることは理解できる。これらは、評者が研究してきた現代日本の山村の生業複合のありようと類似しており、十分に産業化した国の村落生活の特徴をよく示している。この点から、定住化や集団化などの近代化の枠組をすえて南と極北の牧畜民の変容の比較研究を提案する筆者の

要であろう。

第三は、本書の進化とミクロ適応に関する理論的な枠組みについてである。本書は、社会人類学に生態人類学で用される二つの概念を導入して新たな人類文化の研究を意図する点では理解できるが、社会変容という従来の用語をミクロ適応に置き換えることには、長所・短所があるのではないだろうか。まず、長所は比較研究の枠組みを提示して他の地域の研究も関与できるよさである。これまで、ポスト社会主義研究は、ポスト社会主義国を研究していないと参加が難しいという閉鎖的な側面があったが、本書の適応と進化の概念は、さまざまな地域の研究者の衆知を集めるにはよい枠組みである。たとえば、寒冷地の適応というテーマは極北だけのものではない。ヒマラヤやアンデスなどの高地への牧畜適応が比較的素材にもなるであろう。なかでも、ヒマラヤでは冬季の家畜飼育に採草地の利用が不可欠である。その一方で短所は、生態人類学でも批判されているように、適応の概念は予定調和を前提とした用語にもなりかねないことである。多くの研究は、何の基準もなままに地域住民は環境に適応しているということになる。また同時に、本書の惜しい点は、適応に焦点をおくあまり、冒頭で述べたポスト社会主義時代のマイノリティー研究にサハ人の牛馬飼育適応の事例が、どういう新たな貢献をしたのか、あるいはしていないのが、本書で詰めて

議論されていないことであろう。

#### まとめ

本書は、現地調査を中心に据えて牛馬飼育（副業）にかかわる生業活動を中心とする現在のサハ農村の姿を伝えるものであり、ポスト社会主義諸国なかでの家畜飼育のあり方を紹介する豊かな資料が満載している。この意味で地域研究として、今後さらなる研究の展開が期待できるであろう。同時に、評者は、今後、筆者が本書で論じたミクロ適応のみならずマクロ適応の把握を積み重ねることによって、人類文化史のなかでの「極北の牧畜民サハ」の特徴を見出すことができるのではないかとみている。以上の二つの方向へ、筆者の研究のさらなる展開を期待したい。

#### ●参考文献

- 池谷和信（二〇〇七）「チユコトカ自治管区におけるトナカイ 牧畜の変化の多様性——危機に対するチュクチの対応」。  
煎本孝・山田孝子編『北の民の人類学——強国に生きる民族性と帰属性』京都大学学術出版会、一四九—一六二頁。  
斉藤農二（一九九五）「サハ（ヤクーチヤ）の草原と牛馬飼育」『スラヴ研究』第四二巻、一三五—一四七頁。  
山田孝子（一九九八）「サハ・ヤクートにおけるシヤマニズムの復興と自然の意味」『エコソフィア』第一号、一二九—

四七頁。

- Crate S. (2006) *Cows, Kin, and Globalization: An Ethnography of Sustainability*. Alta Mira Press.  
Elphick R. (1977) *Krpal and Castle: Khoikhoi and the Founding of White South Africa*. Yale University Press.  
Yoshida, A. (2001) Some Characteristics of the Tundra Nenets Reindeer Herders of Western Siberia and their Social Adaptation. *Semri Ethnological Studies* 59: 67-80.

#### ●著者紹介

- ①氏名……池谷和信（いけや・かずのぶ）。  
②所属・職名……国立民族学博物館民族社会研究部人類環境部門・教授、総合研究大学院大学文化科学研究科・教授。  
③生年・出身地……一九五八年、静岡県。  
④専門分野・地域……環境人類学・人文地理学、アフリカ地域を中心とした地球学。  
⑤学歴……東北大学大学院理学研究科。  
⑥職歴……北海道大学文学部北方文化研究施設文化人類学部門助手（五年間）を経て、国立民族学博物館助手・助教・教授に至る。  
⑦現地滞在経験……ボツワナ（三年以上）、ケニアや南アフリカ（それぞれ一年以上）、その他一〜三ヶ月の短期滞在は、アフリカ以外にも多数。  
⑧研究方法……自然に強く依存している社会での長期参与観察、および古文書館での資料収集を行い、地域の生態、社会、歴史を総合的に把握する方法を模索。  
⑨所属学会……アメリカ人類学会、日本地理学会、日本アフリカ学会、生き物文化誌学会、人と動物との関係学会、日本養豚学会ほか多数。  
⑩研究上の画期……一九八七年のボツワナでの初めての長期滞在の経験。サンの人々とカラハリ砂漠を歩きまわり、木に登って一夜を過ごした。ライオンが近くまでやってきたが助かったことで、自然と人のかかわりの研究は命がけであると痛感する。  
⑪推薦図書……川喜田二郎『野外科学の方法』（中公新書、一九七三年）。古い本ではあるが、現在の科学の中で危機に瀕すると思われるフィールドワークの方法を再考するヒントが含まれている。

## 水谷裕佳 著

『先住民・パスクア・ヤキの米国編入  
——越境と認定』

(北海道大学出版会、二〇一二年)

佐々木直美 (法政大学准教授)

本書は、メキシコと米国の両国にまたがって居住する先住民族ヤキのうち、米国アリゾナ州を中心に居を構えるヤキの一部の人々が米国先住民「パスクア・ヤキ」となっていく過程について、米国先住民研究の視点から描いた意欲作と言えよう。本書の構成と内容は以下のとおりである。

まずは序章で本書を執筆する動機が明かされている。きっかけは、パスクア・ヤキの人々に対して米国先住民認定の理由や経緯について著者が質問した際の興味深い出来事であった。米国政府による先住民認定は、当該集団の主権の保持、トライブ政府の設置や保留地の獲得などといった米国社会での権利獲得を意味する非常に重要な出来事であるにもかかわらず、先の質問に対する返答は「知らない」または「分からない」といったものばかりであった。

れてきたヤキの戦鬪的イメージや野蛮性を不当に強化する偏った報道へと容易に結びついたことも著者は指摘する。そのなかで当時、米国の新聞が報じたヤキ像についての分析は、ねつ造記事の横行や、文章と写真・挿絵などの映像資料との不整合といった偏見報道が新聞の読者に植え付けられたヤキのイメージを著者は鮮やかに浮かび上がらせる。それによって明らかになったのは、メキシコのヤキについては恐怖心を煽るような戦鬪的なイメージで報道する一方、アメリカのヤキについては、当時の米国に流布していた米先住民のステレオタイプに重ね、両者はあたかも異なる集団であるかのように伝えられた可能性である。さらに、この章における重要な指摘は、米国への移住の意義である。メキシコ政府によるヤキの迫害期とされる一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、伝統的な民族の土地を遠く離れて多くのヤキが国境を越えた動機は、単に個人的理由からではなく、メキシコ軍と戦う同胞に対して国境の向こう側に民族存亡の拠点を形成することも目的であったという視点は重要である。米国のヤキは、武器や資金を非公式のルートでメキシコのヤキのもとに送り届けるなどして、物資・精神の両面において強い繋がりを保持していたことが示されている。また、メキシコ側からは「歴史」が運ばれたという逸話には思わず唸らされた。シャツの内側に文章を縫い付けて、走者が米国に向けて非公式ルートを駆け抜

そこで本書は、パスクア・ヤキの人々が自らの歴史について知り、語る一助となるべく認定の経緯についての考察であり、すなわち研究対象者を中心とした読者と想定した研究成果である。以下に本書の構成と各章の紹介を行う。第一章「現代のパスクア・ヤキを取り巻く議論」では、パスクア・ヤキと、米国における先住民認定制度について詳細な解説がなされている。さまざまなレベルで存在する認定基準の紹介は、巻末付録1「インディアン再組織法の概要」と併せて、米国先住民研究のためには言わずもがな、広い意味でエスニック・スタディーズに関心を寄せる者にも貴重な参考資料と言えるであろう。第二章「メキシコにおけるヤキの反乱と越境の再考」においては、パスクア・ヤキの直接の祖先であるヤキが、メキシコのポルフィリオ・ディアス政権（一八七六―一九一一年）下に伝統的な居住地を離れてアメリカへ越境せざるをえなくなった政治・社会的背景が明かされている。それによると、工業化を柱としたメキシコの近代化に邁進していたディアス政権は、経済発展を目的としてヤキが伝統的に居住していた肥沃な土地の収奪に乗り出し、強制移住や反抗的な者たちの奴隷化によってヤキを迫害した。一方、これに対して生じたヤキによる武装蜂起は、米国の新聞でも報じられることとなり、一六世紀にスペイン人がアメリカ大陸へ到達して以来、入植者に対して度重なる反乱を起こしたことで付与さ

けたというのだ。この「シャツ一杯の歴史」（五七頁）について、未だそのようなシャツの現物は確認されていないと著者は述べているが、民族存亡の機にヤキが「書かれた歴史」に託したものはいったいどんな内容だったのか、ついでに思いを馳せたくなるのは評者だけではなからう。さて、第三章「米国内西部における観光産業と先住民」は続く第四章とともに本書の核であり、いよいよ米国先住民「パスクア・ヤキ」誕生のプロセスが解明される。当時、国家的アイデンティティの構築を模索していた政府は、先住民に「米国内西部」の一端を担わせることにした。同時に一九世紀から二〇世紀初頭にかけて鉄道と高速道路が発達すると、メキシコから移住してきたヤキが居住するアリゾナを含む米国内西部では観光開発が盛んに行われたことが示されている。メキシコから買収したばかりの西部の自然とそこに住む人々は、エキゾチックで魅力的な米国内の観光資源を形成することになった。米国の主流社会が当時求めていた「先住民像」や「国家の歴史」の枠組みにアリゾナのヤキが都合良くはめ込まれて行く様子を豊富な資料によって丁寧に裏付け、そのことが結局は後の保有地獲得や先住民認定へとつながる重要な出来事であることを指摘している点は、カリフォルニア大学バークレー校のエスニック・スタディーズ研究科において米国先住民研究を学んだ著者ならではの手腕であろう。第四章「難民労働者か



ら米国先住民へ」においては、二〇世紀前半に難民として米国社会に受け入れられていたヤキが、安価で重要な労働力の提供者として他の米国先住民と共に米国の労働市場に編入されていく様が描かれている。また、一九三〇年代から一九六〇年代にかけての米国の移民政策および先住民政策の転換と、一九六〇年代に生じたアメリカ・インディアン運動が、ヤキの米国市民権獲得、一九六四年の土地付与、さらには一九七八年の先住民認定を強く後押しし、さらにはヤキの人々に米国社会への積極的な参加の意識改革をもたらしたという指摘は、ヤキと他の米国先住民との関係も著者が意識的に考察の視野に入れていたことがうかがえる箇所だ。第五章「先住民認定後のパスクア・ヤキ社会」では、米国先住民として自覚的に行われているパスクア・ヤキの人々の活動を紹介する(付録2「パスクア・ヤキ・トライブ憲法の概要」参考)とともに、本書の付録3として収められている「パスクア・ヤキ・トライブ憲法(改正中) 取締規則第7部・研究」が今後のパスクア・ヤキ研究へ課すことになるであろう課題とその解消へ向けての提案が述べられている。終章においては、再び最初の疑問へと立ち返る。パスクア・ヤキの人々が米国先住民認定の経緯について「知らない」「分からない」と答えた意味について、著者はこれまでの考察から「ヤキの人々の大半が米国先住民認定の過程に参加できなかった、いわば他人

二四頁) 事実が示す「パスクア・ヤキ協会」とエスニシティとの関係に疑問が残る。もう一点は、パスクア・ヤキのジレンマについてである。民族の存続を願いながら国境を越え、米国に移住し、アリゾナに居を構えたヤキの人々は、米国で土地と社会的権利を確保し、「パスクア・ヤキ」となる過程で、カリフォルニア、テキサスなどに在住していたため認定基準を満たさなかった民族の一部を切り離すこととなった。さらには、米国主流社会が提供する「インディアン学校」での教育や英語教育を受けることによって主流社会が求める「インディアン像」を内在化し、汎インディアン社会の一員としての意識を高めていった(二二八、一三三頁)。その結果、著者も指摘する通り、「パスクア・ヤキ」になることで、米国内の認定から漏れたヤキや、メキシコのヤキとは「心理的な距離」が生まれている(一六六頁)。今後、パスクア・ヤキとそれ以外のヤキはどのような関係を築いていくのだろうか。主流社会から得た先住民認定と引き換えに失ったものはないのか。ヤキの人々の「多重的な生の声」が聴こえてくるような研究、あるいは国境や集団を越えた比較研究など、著者の今後の研究に自ずと期待を抱かせるような刺激的な著書であることに間違いはない。

事のように捉えている」(一六八頁) からであり、彼らにとってより重要な出来事は、文字通り自分たちの居場所を確保できた、土地獲得であったと結論付ける。

以上が本書の簡単な要約であるが、最後に評者がとくに興味を抱いた点について若干のコメントを試みる。一点は呼称についてである。「パスクア」がスペイン語で「キリスト教の復活祭」を意味することを注で記し(三三頁)、この呼称が「米国先住民としての権利を獲得した際にトライブとして得た呼称である」(二四頁) と解説しているが、民族やアイデンティティのトピックを扱う本書においては、もう少し呼称に関する考察があっても良いだろう。つまり、なぜ元々の民族名「ヤキ」ではなく、米国においてスペイン語で、しかもキリスト教と関連する語を民族名に冠したのか、という問いである。復活祭(パスクア)との関連で言えば、二月から四月にかけて行われるヤキによる復活祭の儀礼の一部が米国の観光産業によってとくに取り上げられてきたこと、そしてその理由として、祭りがおこなわれるその冬の時期でも温暖なアリゾナをアピールしたかった同産業の意図は指摘されているが(八〇頁)、一九六〇年代に「パスクア・ヤキ協会」が設立され、一九六四年には協会の活動によって土地獲得が実現し、一九七八年の米国先住民認定の際にパスクア・ヤキとして登録された者は当協会に所属する人々に限定されていた(二二一—

●著者紹介●

- ①氏名……佐々木直美(ささき・なおみ)。
- ②所属・職名……法政大学国際化学部・准教授。
- ③生年・出身地……一九七一年、長崎県生まれ。
- ④専門分野・地域……ラテンアメリカ地域研究、特にペルー。
- ⑤学歴……南山大学外国語学部(イスパニア科)、東京外国語大学大学院地域研究科(地域研究)博士前期課程修了、東京大学大学院総合文化研究科(地域文化研究専攻)単位取得満期退学。
- ⑥職歴……法政大学専任講師。
- ⑦現地滞在経験……ペルー留学(一七歳、二四歳)、トルコ留学(三二歳)。
- ⑧研究方法……フィールドで現地の人々と話し、出来事を共有し、現実を目の当たりにしたときの発見や気づきが研究への活力と動機になっています。データは主にインタビューとアンケートによって得ていますが、質的研究による分析法をさらに勉強する必要があります。
- ⑨所属学会……日本ラテンアメリカ学会、日本文化人類学会、古代アメリカ学会。
- ⑩研究上の画期……三・一一の東日本大震災以降、社会に貢献できる人と地域の研究とはどのようなものかについて改めて考えるようになりました。
- ⑪推薦図書……関雄二・柴田秀藤編『他者の帝国——インカはいかにして「帝国」となったか』世界思想社、二〇〇八年。

# 第三回(二〇一三年度)地域研究コンソーシアム賞 募集要項

## 趣旨

地域研究コンソーシアムは、その規約において「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とする。これにより、人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図る」と述べ、それに続いて、一、共同研究の企画・実施・支援、二、海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、三、研究成果の国内外への発信・出版、四、地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げている。

地域研究コンソーシアム賞は、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあった研究業績、共同研究企画、そして社会連携活動を広く顕彰することを目的として授与される。

## 顕彰部門

- 一、地域研究コンソーシアム研究作品賞……個人ないし共同による学術研究業績で、賞の趣旨に合致する公刊論文ないし図書の商品を対象とする。
- 二、地域研究コンソーシアム登竜賞……大学院生及び最終学歴修了後一〇年程度以内を目安とする研究者による学

術研究業績で、賞の趣旨に合致する公刊論文ないし図書の作品を対象とする。

- 三、地域研究コンソーシアム研究企画賞……共同研究企画で、賞の趣旨に合致し、今後の地域研究の動向に対して大きなインパクトを与えたシンポジウムの開催や研究プロジェクトの遂行などの企画を対象とする。
- 四、地域研究コンソーシアム社会連携賞……学術研究以外の分野で賞の趣旨に合致する活動実績を対象とする。

## 推薦

地域研究コンソーシアム賞は自薦ないし他薦をもとに選考される。

推薦者は個人に限る。また、推薦書の記載は日本語に限る。推薦者は複数の作品、企画、活動を推薦できるが、同一の作品、企画、活動を複数の部門に重複して推薦することはできない。また、一人の個人または一つの組織について推薦できるのは原則として一つの作品、企画、活動とする。推薦書の様式はとくに定めがないが、以下の各項目を記入すること。

- ①推薦者の氏名、所属・職名、主な経歴・研究活動業績
- ②推薦部門(研究作品賞・登竜賞・研究企画賞・社会連携賞のいずれか)

- ③推薦対象の作品・企画・活動の概要……作品の場合は書誌情報と概要、企画の場合は企画の名称と概要、活動の場合は活動の名称と概要。いずれも一〇〇〇字以内(図表等を入る場合、図表等は一〇〇〇字に含めない)。研究作品賞と登竜賞で推薦対象が論文である場合は写しを一部添えること。研究企画賞と社会連携賞への応募では、企画や活動に係わる資料を添付してよい。
- ④推薦理由……一〇〇〇字以内。地域研究コンソーシアム賞の顕彰目的を踏まえた推薦理由。
- ⑤推薦対象と推薦者の関係……他薦の場合は推薦者と推薦対象(者)との関係を明記(とくに、推薦対象の著者ないし代表者と推薦者が親族関係ないし師弟関係にある場合は、その関係の明記)

各部門の推薦対象は以下の通りとする。

- 一、研究作品賞……前年度(二〇一二年)度)及び前々年度(二〇一一年)度に公刊された論文ないし図書の作品を推薦の対象とする。推薦された作品の中から研究作品賞を授与する。

- 二、登竜賞……大学院生及び最終学歴修了後一〇年程度以内を目安とする研究者によって前年度(二〇一二年)度)及び前々年度(二〇一一年)度に公刊された論文ないし図書の作品を推薦の対象とする(「登竜賞」の選考対象には博士論文も含まれる)。推薦された作品の中から登竜賞を授与する。

- 三、研究企画賞……前年度(二〇一二年)度)及び前々年度(二〇一一年)度)に実施された共同研究企画の実績を推薦の対象とする。推薦された企画の中から研究企画賞を授与する。
- 四、社会連携賞……前年度(二〇一二年)度)ないしそれ以前から行われてきた研究以外の活動で、地域研究の発展に寄与する実績を推薦の対象とする。推薦された活動実績の中から社会連携賞を授与する。

## 選考

審査委員会は地域研究コンソーシアムの委嘱を受けた五名程度の専門家で構成される。

## 審査委員

家田修、飯塚正人、田中耕司、中村安秀、毛里和子(敬称略、五十音順)

## 顕彰

- 一、年次集会で授賞式を行い、審査委員会による講評、会長による賞状の授与、受賞者による受賞スピーチを行う。
- 二、『地域研究』誌上で審査講評と受賞対象の概要を掲載する。図書が受賞対象となった場合は書評として掲載することもありうる。
- 三、地域研究コンソーシアム・ホームページに審査講評と受賞対象の概要を掲載する。

## 募集

応募締切……二〇一三年五月七日(必着)